

徳川秀忠は「凡庸な二代目」などではなかった。

～以下、小書評「徳川秀忠『凡庸な二代目』の功績（著者：小和田哲夫）（毎日新聞 99.12.5）より～

徳川秀忠は、偉大な父家康の陰に隠れる「凡庸な二代目」と見られることが多いが、（中略）家康が豊臣政権の五大老の一人として畿内で政務に従事していたあいだ、江戸にあって関東二百五十万石のの支配を遺漏なく進めていた（中略）。たしかに、秀忠は、上田城攻めの不手際から関ヶ原合戦に間に合わなかったことなど、いくつかの失態を演じてはいる。だが、そのことで、秀忠を二代目に据えるという家康の決意が覆ることはなかった。すなわち、乱世のときには、結城秀康のような勇猛な武将が適しているが、国がある程度収まってくれば守成型の秀忠のほうが向いているという判断である。秀忠は、創業期の功労者（福島正則や最上義俊など）を切れなかった家康と違って、いとも簡単に有力外様大名の改易をやってのけた。全部で二十三家を取り潰しや改易処分にしたというのは半端ではない。こうしてみると、秀忠は、幕藩体制の強化に貢献した最も理想的な二代目だったというべきかもしれない。（雅）